

ダンジョンで美醜逆転は間違っているだろうか？

夜と月と星を愛する者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

A. もちろん間違っている

目次

本来の主人公がTSは間違っている	1
出会って次の日で付き合うのは間違っている	12
正体（半分）を明かすのは間違っている	22
女だらけのファミリアに入るのは間違っている	32
幕間1	41
視線が野獣の目なのは間違っている	46
鍛冶神を専属鍛冶師にするのは間違っているだろうか	53
相手が硬いならぶっ壊れるまで殴って倒せばいいと考えるのは間違っている	58
複数の女性と買い物に行くのは間違ってる：服屋編	66
ナマモノ「いらっしやいませにや〜」	70

本来の主人公がTSは間違っている

いつもニコニコ、貴方の背後に這い寄る混沌
ニヤルラトホテP

すみません。ブラウザバックしないでください！

え？メタイって？……気にするな！

「お主は一体何を言っておるんじや……」（――；）

神（作者）から叩かれそうな事を口走っているところに突然、まるで最初からいたかのように肩まである白髪、これまた立派な髭、そして白いローブを纏ったお爺さんがいた

ツ!!誰だお前は!

「地獄からの使者!スパイダーm……って何を言わせるんじや!」

おや、ノリツツコミがいいですねえ

「……お主、死んだというのにお気楽すぎやせんか?」

え?・

「じゃから……死んだんじやよ。お主は」

は?・え?ん?……はああああ!!?

「まあ、そんな反応をするよな普通」

え?・え?・え?・な、なんで!?

「少し待て……えつとな……」

お爺さんが、何処からともなく一つの紙を取り出すと、何かを確認するように紙に書かれてある内容を見た

「死因は……走っている最中にアキレス腱が裂傷をしその拍子に地面に転がっていたバナナを踏んで滑り道路に飛び出してトラックに轢かれたと……なんというか……不運な男よな」

は？アキレス腱が裂傷してバナナを踏んで滑って轢かれた？…マジで？

「マジじゃ」

マジかよおゝ死因が恥ずかしい…ん？そういや、俺喋ってないよな？

「そうじゃ、今のお主は魂だけじゃからの」

……やっぱ死んだんだな俺…ん？てかあんた誰だ？

「今頃か…：儂はまあ、お主らで言う神じゃ」

紙？髪？…：GOD？

「そう、GODつまり神じゃ」

………そんなことよりおうd

「受け入れろ」

いや無理だろ

「まあ、そうじゃろうな…：とと、話が脱線したが、お主をここに呼んだのは此方の不手際だからじゃ」

ん？不手際？何があつたし

「儂の部下が間違つてお主の全てが詰まった書類を燃やしてしまったのじゃ…：（本当は寒いからと言う理由で燃やしたのじゃが…：あの駄目神…：どうお灸を添えてやろうか）」

ええ…：書類を燃やされたから死んだって…：とほほお

「…：本当にすまんかった、代わりと言ってはなんじゃが、転生させるぞ？」

…：…：え？転生？あの有名な転生？チート貰つてヒヤツハーするあれ？

「チートとは特典の事かの？そしてお主の考えておる転生であつておるぞ」

やったぜ!!

「まあ、お主が特典を決めることは出来んがな。転生先も」

……つまり…

「特典はお主がおみくじで、転生先は完全ランダムじゃ」

…これは俺の運が試される！↑幸運C

「まあ、お主がどんな特典を得るのかは儂も楽しみなんじゃがの」
すると、神様が指を鳴らすと、神様の横に神社によくあるおみくじ
があった……クソでかいが……一体何個のくじがあるんだ？

「……あ、そういやお主……手が無いの」
……あ……どうしよう？

「……しようがない。儂が引くとしよう」

お願いします！神様仏様幸運の女神様！

「儂は神なのじゃが……それと特典は3つじゃ……それでは行くぞ」
神様が一つ目のくじを引くとそこには

【F a t eアキレウスの肉体】

……え？

「ほうほう、あの英雄の肉体ということとは不死性とアキレウスの全ての
技術を得ることができるといわけか……ここでは運が良いのお……
死因はあれじゃが（ボソツ）」

おい、聞こえてんぞ……てか、魂だけなのに聞くとはこれいかに……
耳って何処にあるんだ？

「さて、次に行くぞ」

そしてまた引くとそこには

【我が手に^{アポ}ッ

……ちゆ、厨二くせえ

「……まあ、便利と考えれば良いな……次で最後じゃ」

そして、最後のくじには

【英雄威光】

……いや、最後が一番わからないんですが？英雄はわかる……だが、
威光ってことはあれだろ？威厳的なやつだろ？……てことは英雄と
しての威厳ってことでもいいのか？……英雄の威厳ってなに？

「そうじやのお……英雄威光とはいわば英雄の中の英雄みたいなもん
じゃな……英雄としての雰囲気、格、魂、言動、行動とかの色々じゃな」

……ええ……正直、田舎とかでのんびりしたかったんだが、英雄つ
てことはあれだろ？困難に立ち向かったり、常人では出来ないことを
成したり、人々の為に戦ったりとか……早死にしそう

「まあ、こればかりはすまんのお…まあ、アキレウスの肉体を得ておるから神の武器と神性が高くない限りお主に傷を付けるのは困難じゃから問題ないじゃろうて」

でもそれって俺がいた世界のように平和だったら完全に異常者や解剖待った無しですよね？

「…………お主の運を信じれ」

おいこら

「では、行って来るが良い」

あれ…………意識…………が…………

俺は意識が薄れる中、確かに聞いた

「…さて、あの駄目神アクアにお灸を添えねば」

あの駄目神のせいなあ!!

森にある湖にて

「ふんふんふふーん♪」

白髪赤眼でどこか小動物でウサギを思わせる少女が鼻歌を歌いながら湖に着いた、少女は目的の場所に行く途中にあるこの湖で水浴びをしようとしているだ

「さてと…………ん？」

その時、女の子の視界に緑色が映った

「…え？…人!?ど、どうして!?もしかして、魔物に…だ、大丈夫?!」

女の子が視界に映った人影に近寄ると

「…ほえ？…男？…男おおおおお!!」

何故か大声を出すと、大声で目を覚ましたのか緑色の髪をした男が起き上がった

「……、ここは何処だ？」

「あわわわわわ!!男の人だ、お爺ちゃん以外で初めて見た!」
「ん?……」

男……転生者……アキレウスは隣で慌てている白髪の女の子を見
やった

(可愛いな。ウサギみたいだ……とと、違う。まずはここが何処だが
聞かねえと)

「なあ」

「ひゃ、ひゃい!?!」

「……」

「ツ~~~~!」

顔を真っ赤にして恥ずかしくているが、まずは現状だ

「……聞いていいかな?」

「あ、はい!」

「ここは一体どこだ?」

「え?ここはオラリオの近くにある森でその森にある湖に今僕達はい
ます……えっと、知らないんですか?」

異世界から来たからなあ……誤魔化すか

「すまない。記憶が混濁してるんだ、時間が経てば治ると思う。何故
ここにいたのかも」

「なら、良かった」ホッ

それなりにある胸を撫で下ろしながら白髪の女の子は安堵した

(……煩惱退散煩惱退散煩惱退散!)

悲しきかな元は高校生であるから異性に飢えてる。つまり彼は彼
女のいない悲しき男だ、だが、今の容姿は誰もが認めるイケメンのア
キレウスなので問題はないだろう(あります)

「……そうだった、起こしてくれてありがとう(大声で起きたが)、あの
ままだったら何が起きたかわからなかった」

アキレウスは本音を言った。野盗やスリにでもあったら貯まった
ものではないからだ

「う、うん。あのままだったら魔物に襲われてたかもしれないからね」

(…なに？魔物？)

「魔物ってなんだ？」

「え？…あ、そうでしたね記憶がまだ…魔物って言うのはダンジョンで湧いて人を襲うのが魔物です。今僕達がいる地上では昔の魔物が地上に出てきた魔物たちなんです。ダンジョンから出てきた魔物は弱くなりますので地上にいる魔物はそこまで危険じゃないんです。そしてダンジョンがあるのが迷宮都市『オラリオ』なんです」

男は少女から出た単語に反応した

(オラリオ？……てことは、ここはダンまちの世界か!?そういうえば、スルーしてたが、さつきもこの子普通にオラリオって言ってたし……うわあ、面倒くさい事沢山あるじゃん。主にフレイヤとかフレイヤとか主人公関連で)

「教えてくれてありがとな」

「ひう!？」

少女は突然、顔を赤くして胸を押さえ出した

「ど、どうした!？」

「あ、ま、待って」

少女が静止をかけた時は時すでに遅しアキレウスとの距離が密着するほど近づいていた

「あ、あ、…きゆうく…」

少女は目をぐるぐるとして、とうとう気絶してしまった

「え？……もしかして、アキレウスの顔って彼女にとって駄目だったのか？」

アキレウスは方向違いの勘違いをしていた

「はー……あれ？男の人は？」

少女が辺りを見回すとそこには男の影はなく少女は落ち込んだ

「うう、折角男の人と出会えたのに……それとも、夢だったのかな？」

「夢じゃないぜ」

少女の呟きに返答が来た、恐る恐る少女は声の方向を向くと

「いやあ、魔物ってこいつらのことなんだろう？初めて戦ったが案外いけるな」

少女が視線を男の後ろに向けるとそこにはまだ灰になっていないダンジョンの中層に出てくるミノタウロスがいくつもの打撃の跡が残って絶命していた

「み、ミノタウロス!?だ、大丈夫だったんですか!？」

少女はアキレウスに詰め寄ると

「おう、これでも格闘戦はできるぞ（アキレウスの肉体だからのと、格闘戦で次はどう動けばいいのか、弱点などが瞬時に頭の中に浮かんだから）」

少女が一通りアキレウスの体をペタペタと触れて傷が無いことを確認するとまた安堵した、そして疑問に思った

「（ミノタウロスを倒したってことはこの人は恩恵刻んでいるのかな？だったらこの人と同じファミリアに入りたいなあ）」

少女は完全に恋する女の子の妄想を繰り広げて、アキレウスは少女に質問を出した

（ここがダンまちの世界だっというんなら白髪赤眼のキャラなんぞ、1人しかいないぞ、だが、原作とズレて妹という可能性も）

「なあ」

「なんですか？」

「君の名前は？……あ、俺から名乗った方がいいな。俺はアキレウスただの旅人だ」

嘘ハツタリだが、少女はその言葉を信じたようだ

「アキレウスさん……あ、僕は

ベル・クラネルと言います！」

憐れ、現実はその簡単にうまくいかない

(主人公本人かよおおおお!!? しかも女になってるし!? 原作どこいった!!?)

その時、少女は思い出したようにアキレウスから距離をとった
「す、すみません! 僕みたいなのがアキレウスさんに触れちゃって、お喋りして……すみません……」

(ん? どういう事だ? こんな可愛い子から話しかけられて嬉しくないなんてことはないだろう)

「どういう事だ? ベルみたいなのが可愛い子に触れてもらえて喋って嬉しく無いなんてことはないはずだぞ?」

「……え?」

「ん? 俺なんか変なこと言ったか?」

「え? ぼ、僕の顔を見てそんなこと言えるんですか!？」

男はベルの発言に頭が追いつかず、疑問符が回り続けていた

「だ、だって僕……醜いし……」

「は?」

アキレウスの口から素っ頓狂な言葉が出た、それはそうだろうウサギを連想させ行動もどことなく小動物を思わせる少女は誰もが可愛いと答えるだろう。なのに醜いといった

「醜いんですよ。僕、村でも僕に優しくしてくれたのはお爺ちゃんと近所のご老人な人ばかりで、村では美しい女の人から舌打ちや醜いって罵倒されて……」

(……いや、まさかとは思いますが……もしかしてこの世界……)

「だから僕みたいな醜い子は男の人から嫌われる。アキレウスさんから嫌われるって思ってる」

(美醜逆転の世界かよおお!!? そうするのはアイマスと東方だけでいいんだよ! 女が多い世界にしるよ!)

「それに、男の人も数が少なくて、男の人は全員美人として
(しかも男性が少ないいい!!?)」

「だから、アキレウスさんとは……距離を……」

アキレウスはそんなベルの眩きを聞くと

「馬鹿だな君は」

「ッ……」

「俺は君の事は可愛いと思う。誰がなんと言おうが俺は君の事を可愛いと断言する」

「……え？」

アキレウスはベルに近づいて、視線を合わせると

「そんな、暗い顔をするな。可愛い顔が台無しだぜ」

ベルの肩より少し長い絹のように柔らかくフワフワしており風になびく頭を撫でた

「う……う……う……」

突然、ベルは目に涙を貯めて

「え!?ど、どうした!?もしかして、触られるの嫌だったか!そ、それなら離れるから!」

「ち、違うー……ただ、嬉しくて男の人から初めて褒められて、可愛いって言ってもらえたのが嬉しくて……」

「……そうか」

アキレウスは会ったばかりの子にかける言葉が見つからなかったのどとにかくベルの頭を撫でることにした、これがハーレム系の主人公なら優しい言葉をかけて相手をキュンとさせるのだが、この世界は男性が少ない。そして、ベルのような可愛い子(この世界では醜い子)が初めて褒められたので、必然的に惚れさせてしまうのだ

「…あ、あの…会ったばかりの人に頼む事じゃないんですが」

「俺で良かったら出来る事ならやるぞ」

「ありがとうございます!だ、だったら…その……抱きしめてもらって……良いですか?」

「それくらいだったらお安い御用だ」

そして、アキレウスがベルを抱きしめて、ベルは最初身を固くしていたが、だんだんと力を抜き、今はアキレウスの胸にしなだれかかっていた

そして、10分ほど経つと、満足したのかベルは離れた

「ありがとうございます！アキレウスさん！」ニコツ

(…可愛い)

「……ああ、いつでも言ってくれこれくらいだったらしてやるから……それとだなベル」

「はい？」

「すまないが俺は今は身寄りが無いんだ、だからここら辺にある程度お金を稼げてどっかに居を構えたいんだが、こっからオラリオはどれくらいかかる？」

「そうですね…だいたいあと半日程ですね」

既にベルはアキレウスとは自然と話せておりアキレウスもベルに對して自然と話している。出会いは1時間くらいだが、それでも2人の距離は友人並みに進んでいた

「そうか、もうすぐに日が暮れるから今夜はここで野宿か？」

「は、はい…そうです」

「……ああ、もしかして寝床がたんねえか？」

アキレウスはベルが少し言い淀んだ原因を直ぐに察して質問をした

「はい……だ、だったら！2人で一緒に使いませんか?！」

「いや、だがなあ。会ったばかりの奴と一緒に寝て良いのか？」

「だ、大丈夫です!……アキレウスさんならむしろ襲ってくれても(ボソツ)」

無駄に高性能な体はベルの小さな言葉もしつかりと拾った

(これはスルーしたほうがいいな)

「なら、ただ焚き火用の枝を取ってくるわ。ベルは火を起こすように石で囲つといてくれ」。

何気に初めて来て、初めての野宿なのに以外と様になってる。これはアキレウスが前世でキャンプに参加してそこで身につけたのだ
「わかりました」

無事に火をつけ、アキレウスが途中で食べられそうな木の実とベルが持っていた干し肉と乾パンを食べて2人は一つの寝床で就寝をしようとした……しかし、意外にも寝床は小さくベルはともかくアキレウスの肉体ではかなり窮屈になり必然的にアキレウスとベルはかなり密着する状況になった

「す、すまんなベル……やっぱ俺は地面で大丈夫だから」

「だ、駄目……僕は大丈夫。アキレウスさんの体温を感じながらだから……安心出来るし……そ、それよりアキレウスさんの方は大丈夫？」

「俺も問題ない」

（嘘です。ベルの胸がさつきから俺のお腹にムニユムニユと当たって悶々としてます……煩惱退散煩惱退散!!）

「なら良かった……おやすみ。アキレウスさん」

ベルは目を瞑って寝始めた

「ああ、お休みベル。初対面の俺を信用してくれてありがとな」

アキレウスは無意識にベルの頭を撫でながら本人も目を瞑り微睡眠の中に入っていた……ベルは頭を撫でられて嬉しそうにしながら

出会って次の日で付き合うのは間違っている

チュンチュン

湖の近場にある寝床から1人の男が出てきた

「んー……朝か……夢じゃ……ないんだな。……はあー……」

昨日の事が鮮明すぎて現実味を帯びず……いや、もともと転生して
る時点で現実味もへったくれもないが

「さて、まだ、早いし……この体のスペックを確かめるか」

アキレウスの肉体と言っても中身は異世界から来た普通の男なの
でまずは体を慣らさなくてはいけない

「昨日のミノタウロスでわかったが、脳が肉体に追いついてない。1
日2日で大きな成果は出ないと思うが……まずは走るか」

そう言つて、クラウチングスタートの構えをして……踏み込む

ピシユン!!

「はあ!!……やべー!」

予想外の速さに驚き目の前にあつた岩に激突した

ドゴーン!

「イタ……くはないな。蚊に刺されたみたいなき感じだ……本当にこの
体は凄いな。よし!足の速さはF a t eのアキレウスと同等だが、体
に脳が追いつかねえ……練習あるのみ!」

時には木にあたり

バギツ!

また岩にあたり

ドゴーン!

魔物をひいて

グギャ!?

時間にして大体1時間

「ふう、スタミナもあるし文句なしの高スペック。速さも慣れたな。
もともと肉体はアキレウスだからいわば数日筋トレしてなかった人
程度しか落ちていなかったのか……」

そう、ボデイビルダーでも数日筋トレしないと筋肉は落ち

る。この場合は転生したのもあるが、中身が高校生なので、少しこの体に追いつかなかっただけなのだ

「それじゃあ…次は…英雄威光はいいな。それならアポーツの方を練習するか……」

アキレウスは目の前にある木の枝に手を向けて

「アポーツ！」

シューーン

「つて！出来ないんかい！……ん？」

僅かだが、アポーツと唱えた途端体から何かは抜けるようなのを感じた

「てことは、間違っではないが、何か条件があるのか……今の体から抜けていった何かか？……だが、一体その何かはなんだ？……」

（何かとはなんだ？……このスキルを満足に操作できるはずの何か……いや、待てよ？アポーツつてのは一種の念能力みたいなものだったはずだ、だったらこれはスキルというより…「魔法」？……じゃあ、何かはもしかして魔力か？……だが、どうやって物を取り寄せる。魔力だとして、魔力を操作できないといけないのか？……わからん！）

流星に昨日から異世界に来たばかりの人間にはなかなか難しいよ
うだ

（ん？）

その時、天から神託がくだった

『逆に考えるんだ、魔力を操作しなくていいじゃないかと』

（あ、安○先生！……そうか、魔力を操作しないんじゃないかと、魔力を込めればいい！）

神託（W）の言葉により逆転の発想をすることにより。魔力を操作するんじゃないかと、取り寄せるものに魔力を込めればいいという考えが浮かんだ…アキレウスは早速木の枝を掴むと

「……あれ？魔力つてどう込めるんだ？」

今この場に誰かいたのならズコーー！っといった感じで頭から地面を滑っただろう

「…あ、アポーツを唱えた時に抜ける感覚がしたが、それをどうにか上手く扱えれば……『アポーツ』！」

（よし、魔力が抜ける感覚がした、これをどうにか体の中で……ん？やり方がわかる。これもアキレウスが体そのものに身につけたからか、ありがとうアキレウス）

英雄アキレウスのお陰で、なんとか魔力を掌に集めて木の枝に練ることとに成功した。そして距離をとって

「…よし……『アポーツ』！」

パシ！

見事、木の枝はアキレウスの腕に収まった

「よっしや！成功した！……あ」

喜ぶのも束の間、アキレウスは大切な事を忘れていた

「やべーベルのここに戻らねえとー」

流石に時間も時間なので、ベルは既に起きているだろう。そしてアキレウスは来た道をアキレウスの俊足を持って駆けた

「ヒツグ……うう……アキレウスさん……」

戻るとそこには膝に頭を埋めて泣いているベルがいた

「す、すまねえ！」

と、そこに物凄い速さで戻ってきたアキレウスが、謝った

「うあ……アキレウスさんー!!」

声を聞いて顔を上げるとそこには昨日と同じ姿をした、アキレウスがいた、そして感極まってアキレウスの胸にベルは飛び込んだ

「すまなかつた、ちよいと鍛錬したら遅くなっちゃった」

「ううん……ちゃんと戻って来てくれたから嬉しい……でも……寂しかった

た…また、1人になるんじゃないかって、心配で…」

(そうだったな。ベルの爺さんはベルを置いて何処かに行っちゃったんだっただな…)

「大丈夫だ、昨日今日の付き合いだが、お前とは仲良くなったからな。お前を1人にはさせないさ」

アキレウスはベルの頭を撫でながら囁いた

「ツ……それって……告白?」

「……んん……そう……だな……」

ベルの上目遣いに根負けしてアキレウスは肯定した

「え!?そ、それって、つ、つまり!ぼ、僕とアキレウスさんが、つ、付き合い合っってことだよな!?!」

行程を飛ばしながらいつのまにか恋人まで進んでるが、アキレウスは彼女が出来たことがない。こんな可愛い子と付き合い合えるならいやと思

「まあ、昨日会ったばかりの男と付き合い合っってのもどうかと思うが、まあベルがそれが本望だったらそれでいいぞ」

「……!!や、やった!僕にも彼氏ができた!……あ、えつと、それと、昨日会ったばかりの人と付き合い合っっていても僕の村に商隊の人たちが来てそのら中に男の人がいて、あつて1時間も経たずに僕の村の女の人と付き合っつて、家の中に入っつていったよ?」

(ええ……そんなの出会い系サイトでも起きねえぞ、しかも家の中に入っつていったつて……一体ナニをしたんですかねえ?)

「そ、そうか、さて、それじゃあオラリオに行くとするか、まずは片付けな

「う、うん……えへへ」

ベルは流れるような動作で俺の横に並び恐る恐る俺の手を握ると、そのまま腕を抱きしめた

(……柔らかいものが俺の腕に!)

アキレウスが煩惱に悩まされながら片付けをするといつもより少し遅いくらいで準備が整った

「さて、それじゃあ行くか！」

「う、うん！」

森を抜け、歩道を歩くこと1時間

「スーリスーリ……えへへ〜」

ベルはアキレウスの腕を離さずつと抱きしめたまま歩いていて、流石にこんな嬉しそうにしているベルに辞めろとは言えず、こんな状態が1時間も続いていたのだが、流石に歩くペースが遅いと感じたアキレウスは

「なあ、ベル」

「ん？なに？」

「オラリオに早く着きたいからお前を抱っこしていいか？」

「え？え!?だ、抱っこ!?てことはお、お姫様抱っこ？」

アキレウスはおんぶの事を考えていたのだが、ベルがキラキラした目で此方を見てくるので今更違うとは言えずまた肯定してしまった「えへへ、僕一度でいいから男の人にお姫様抱っこして欲しかったんだ」

ベルの見た目も相まって、その2人は姫を抱っこする騎士に見えないくもない

「そうか……かなり早いが問題ないよな？」

「早いつてどれくらい？」

「馬車の全速力の数十倍」

「え?」

ベルが疑問を投げかける前にアキレウスは地面を蹴った

「うわああ!!は、速い!速すぎるよ!アキレウスさん！」

「そういうえば、せっかく俺たちは付き合ってるんだ、さんなんて堅苦しいことは言わずアキや、レウスって呼んでくれ」

「え?じゃ、じゃあ……れ、レウス?……くく!!は、恥ずかしい！」

「今の可愛いかったぞ、それと何回も呼んでたらいずれ慣れる」

「そ、そんなー!？」

少女を抱っこして歩道を駆けていく1人の戦士にして英雄はオラリオに向けて駆ける。誰よりも。何よりも速く駆ける

「はあ、はあ、はあ……は、速すぎるよレウス……」

ベルは息を切らせオラリオの城壁が見えるところまで走ってくる
と、流石にベルの体力が持たなかったので、近くの草原に腰を下ろし
ていた、因みに膝枕…膝枕！↑ここ重要

「と言っても俺がベルを膝枕してるんだがな」

「え？」

「いや、なんでもない。さて、ベルも大丈夫そうだし行くとするか、最
初は宿をとらねえとな……と、そういえば昨日倒したミノタウロスか
らドロップしてたミノタウロスの角を売らねえと、流石にベルにいつ
までも助けられもらつてばつかじや悪いしな」

「ぼ、僕は大丈夫だよ？むしろ、レウスと一緒にいれるなら僕はなん
だってするし」

「コラ、女の子がなんでもなんて事は言っちゃダメだ……まあ、その気
持ちは嬉しいがな」

アキレウス改めレウスは頬をぼりぼりと掻きながら気持ちを伝え
た

「さて、それじゃあまずはおラリオでミノタウロスの角を売って、宿を
とって、それから所属するファミリアを探すとするか」

「うん」

そして、2人がオラリオに入ると奇異の視線とリア充へ向ける視線、そしてアキレウスを情熱的に見つめるこの世界では美しい女性たち

「うう」

「大丈夫だって、周りの事なんて気にするな。ベルがしたいようになればいいさ」

「…そ、そう？…だったら…えい！」

ベルは意を決してアキレウスに抱きついた

「いや、まあ、したいようにすれば良いとは言ったが、これじゃあ逆効果…いや、むしろ女たちが寄ってこなくなるからむしろ好都合…」
「え、えつと…迷惑だった？」

「…いや、むしろこれで良い」

周りの視線を気にする事なくレウス達はオラリオを散策し、途中に寄った武器屋でミノタウロスの角を売ると12000ヴァリスとそれなりの収入になったので、それなりに良い宿に泊まることができ、そしてなんやかんやで夜になり宿のご飯を断ると散策中に見つけた良い店に向けてレウス達は足を進めた

「えつと、どこに向かっているの？」

「豊饒の女主人」

「え？豊饒の女主人って人々から不人気だけど、僕みたいな人や神々からは人気のあの店？」

そう、本来だったら美少女達が接待をしてくれることで人気の店なのだが、この世界では美醜逆転しているので、人々からは不人気なのだ、だが、神々は人間とは違い美醜逆転をしていない。つまり美少女は美少女という考えなので、男神達はよく通っている

「…お？着いたぞ」

「ここが、豊饒の女主人」

「さて、それじゃあ入るか」

カランカラン

「いらつしやいませにや……にや?……お、おとおお男にやあああ!!」

店員の茶髪の猫人のアーニヤは大声を出して驚愕した、男神ならともかく、この店に男の人が来るのは久しい。そしてそれがイケメンだったら尚更

「…2名なんだが……いいかい?」

店中の人達の視線を浴びながらレウスは質問する。ベルは既に視線に耐えられずレウスの服を摘んで後ろに隠れてる

「にや!?…ど、どうぞにや!カウンターでいいかにや?!」

どこか興奮しているこのウエイトレスはレウスに詰め寄った、いつも男からは舌打ちされたり目を背けられたりしたが、レウスはジツとアーニヤを見つめているからもしかしたらワンチャン?と思っっているのだ……しかし、レウスの後ろにいる女の子を見てそれは確信に変わった

「(このイケメン。もしかしてミヤー達のような子が好きなのかにや?後ろにミヤー達並みに醜い子を連れてるし。触られているのに嫌な顔ひとつしないにや……とうとつミヤーにも春が来たにや!)」

アーニヤが頭の中で妄想をしているので、レウスはどうしたものかと迷っていると

「そ、それでは私が席にご案内しますね」

銀髪のヒューマン。シル・フローヴァがレウス達を席に案内した

「…にや!?イケメンはどこ行ったにや!?……ああ!シル狡いにや!ミヤーが席に案内するにや!」

「いいえ、アーニヤはお客を放置していたので、私が席に案内するんです!」

アーニヤが左手、シルが右手を引つ張り。ベルがお腹に抱きつくという他の人がみたら修羅場だと思う光景だが、その中心にいるレウスからすると

(修羅場って見てるぶんには楽しいが、その中心にいとこれはなんとも言えない気分になるな)

「コラ！あんたら何してるんだい！さっさと客を席に案内しな！」

その時、厨房から背の高い人が怒声を浴びせると

「は、はい（にや）!!」

なんとか修羅場は収まり2人で席に案内をしてくれたのでレウスとベルは席に着くと

「それじゃ俺はこれを頼む」

「あ、僕はこれをお願いします」

レウスはステーキをベルはパスタを頼んだ

そして、10分も経たずに料理がテーブルに置かれた、酒もあつた

「ん？この酒は？」

「ミアお母さんが迷惑をかけたお詫びだと」

いつのまにかレウスの隣の席に座っていたシルが説明をした

「俺、酒飲んだこと無いんだがなあ……まあ、ものは試した」

ベルがパスタを口に運ぶのと同時にレウスは酒を飲んだ

「プハア！初めて飲んだが上手いなこれは」

「そうかい？だったらジャンジャン頼みなよ！」

レウスの賞賛にミアは嬉しそうにしながら豪快に笑った

そして、2人が料理を口に運び、シルとアーニヤ、偶にエルフの人からの質問を返している

「ミアー！来たでー！」

赤い髪をして狐目の女……たぶん女が複数の女性を連れて店に入店したそして、エルフの人が席に案内して

「それじゃあ！乾杯！……つかあ！やっぱ酒は美味いでー！」

レウスが入店した人たちを眺めていると

「あの人たちはロキ・ファミリアの人達なんですよ。このオラリオの最強の一角あの席についている人たちが主神ロキ、団長のフィン……」

シルが説明をしている中でレウスは驚愕していた

（なんで、なんで……なんでフィン・ディムナが女なんだよ!?しかもよく見たらガレス以外全員女じゃねえか！あの弱者を虐げるベートも女になってるし!?クール系の美女だし!?本当どうなってんだこの世

界!?)

すると、レウスの視線に気づいたのか、腰まで伸ばした金髪の子が此方を振り向いた

「……………え?」

金髪の子が声を上げると他の人たちも不思議に思っ、その視線を追うと

「…ん?」

男がいた……………そう、男がイケメンがいた、この店に

「「「え?」「」」」

「……………なんだよ……」

レウスは流石にロキファミリアの人達から一斉に視線を向けられいつものお気楽な事はできず、疑問を投げかけることしかできなかった

「「「えええええ!!?男の人おおおお!!」「」」」

まだ、夜は始まったばかり

「ところで豊饒の女主人で僕一切喋ってないんですけど?」

気にしたら負けだよベルきゅん

「ベルきゅんって何ですか!?!」

正体（半分）を明かすのは間違っている

「なるほど、ガレスも大変だったんだな」グビ

「全くじゃわい。儂のファミリアのもんも狙って来るし……儂はもう年なんじゃからそういうのは勘弁してほしいもんじゃない」

「やあ、毎度お馴染みアキレウスだ、今はロキ・ファミリアのガレスと酒を飲んで……ちなみに最初はさんを付けてたが本人から付けないでいいと言われたので呼び捨てにしてる

あれはほんの数十分前

「……男の人おおおおお?!?!?!」

「うお?!なんだよ……」

いきなり叫ばれては流石に驚くぞ

「え?え?なんで男の人が?」

……えーと、胸部装甲が薄いからティオナだな!

「……なんか凄い馬鹿にされた気がする」

なに?!貴様エスパーか!?

「……なあ、ミア……」

紅い髪やからロキだな

「なんだい……」

「なんでこの店に男がいるんや?」

「なんだい?うちの店には絶対男が来ないとも?」

「いや、それやったら他の神々の男共が入っておるやん……そうじゃなくて、なんで子どもがあるんやってことや?流石に本人が自ら入って来たとは思えんしな」

失敬な。こんな美少女ばかりいる店には行きたいと思うのは男なら当たり前だろ……あ、この世界美醜逆転してるんだった

「残念だったね。そこのイケメンは自ら入って来たよ。そこの白髪の

子と一緒にね」

「白髪？……お？……おおお!!な、なんやあの可愛い子は!?!ぜひうちが欲しいで!!」

「やったねベル。家族が増えるよ」

「やめてくださいー!」

…女は全員エスパーかな？俺心でしか思っていないのにツッコミをして来やがった、ベルもエスパーはつきりわかんだね

「なあなあ、君い。うちのファミリアに入らへん?」

いつのまにかすぐ近くに来てやがった……おや?本来だったらヘスティアファミリアに入るのにこの流れはロキファミリアに加入かな?

「え、えつと……ど、どうしようレウス」

そんな困った目で見んといて、俺に視線が集中するやん

「……激流に身を任せろ」

「……つまり入ってことだね?じゃあレウスも来るよね?」

ええよく。彼女ほっぽりだした俺だけ別のファミリアに入るわけないじゃん……

「もちのろんだぜ……なんだよ…神ロキ」

「あ、あんたうちのファミリアに入りたいんか?」

イエスイエス

「ベルが入るんやったらな」

……なんだよ。鳩が豆鉄砲食らったような顔をして……おや、よく見ると店内全員の人そんな顔をしてた

「え、えつとアキレウスさん?ロキ・ファミリアのこと知ってて言うてるんですか?」

ん?ロキファミリアの現状?

「……最強の一角だということと、でつかいホームだということ、ダンジョンの奥まで遠征していること、主神が無乳だということ、美女、美少女がたくさんいること……それくらいか?」

「おや？なんか飛ばされた気がする。おのれ作者め！」

「まあ、他の人たちからするとそうだろうが、俺からすると全員魅力的なんだがなあ……」

「……わ、私も?」

「おう……え!?ど、どうした!?!」

「なんだ!?やべえよやべえよ!シルがいきなり泣き出したよ!シルさんファンから叩かれかねん！」

「い、いえ……わ、私……初めてそんな……事言われたので……嬉しくて……」

「ど、どうすれば!?!……は!ベルの時と同じことをすればいいんだ! (焦ってまともな思考をしてない)」

「よしよし?」

「………は!?撫でたらあかんだろ!?初対面の人に!!……ん?よく考えればベルも会った日に撫でてたな……今更か (遠い目)」

「………あ、あの……恥ずかしい……です」

「お、おう。すまんかった」

「……でも、ありがとうございます」

「………よし!なんとか不快には思われては無さそうだ」

「むう………うみゆ!」

「あ、ベルが頬を膨らませてる。可愛い………つい、頬をつついた俺は悪くない………プニプニしてました………女の子ってなんであんなに柔らかいんだろうね?」

「レウスが他の女を口説いてる」

「いやいや、口説いてないから!」

「………本当?」

「本当」

「俺の後ろで頬を赤く染めてるシルは俺のせいじゃない俺のせいじゃない (自己暗示)」

「………なら良かった………ところで、そこで頭にタンコブが出来て床に

うつ伏せになってるその人はどうするの?」

「人じゃなくて神だがな…まあ、あそここのロキファミアリアの人達のところには渡せばいいだろう…よっこらせ」

俺はベルの言葉を指摘すると、ロキファミアリアがいるところまでロキを抱っこして運んだ

「すまんが、この神をどうすればいい?」

「…え?あ、ああ…その椅子に座らせてくれ」

「了解」

緑髪のエルフ…ロキファミアリア副団長のリヴェリア・リヨス・アールヴさんに尋ねるとおそらくロキが座ってたであろう椅子に座らせた

「…これでよし…ああ、ところでロキファミアリアに入団したいんだが…どうすればいい?」

「え!?ほ、本当に入るのかい?」

金髪の小人族…ロキファミアリア団長フィン・デIMUMナ(♀)が驚いたように尋ねた

「おう!ベルが神ロキに勧誘されたからな。ベルを置いて別のところに行くわけねえだろ」

「……てめえは…あの白髪女とどういう関係なんだ?」

およ…原作と変わらない口調ですな…ベート(♀)さん

「ベルの…まあ…彼氏だな」

流石に他人に俺たちの関係を教えるのは恥ずかしくて頬を掻いた

「っ……そ、そうか…」

おや?なんか元気がない…しかも尻尾も垂れてるし耳も垂れて、誰がどう見てもシュンとしています

「彼氏って…あの子と?」

「そうだぞ、どうだ?…自慢の彼女だ…と言っても今日から付き合い始めたんだがな」

「…へえ…ふうん……」

…あのテイオナさん?俺の勘違いでなければ目がやばいんですけど?例えるなら野獣の目

「ガハハハ！お主面白いやつじゃの！」

ま、そりやそうか、この世界の人からすると俺は醜いつまりブサイクな女の子と付き合ってるように見えるんだからな

「俺の女の悪口を言うなよ？言ったら…流石に俺は我慢できん…」

「ツ…：おう、肝に命じておくわ…：さて、ここで会ったのも何かの縁。どうじゃ？ドワーフの火酒じゃ…ほれ、一杯！」

確かかなり度数の高い酒だったな…まあ、物は試しだ

「おう、それならありがたく…：かあ！かなり強い酒だが、味は悪くないな」

酒を今日初めて飲んだ者が言うセリフじゃないが、苦い不味いつて言う人は多くいるが俺は特にそうは思わん

「…ほう？…お主、それはかなり強い酒で、大抵なもんは倒れたり吐き出すのじゃがのお」

「勿体ねえな…：まあ、確かにこりやあ並大抵のもんじゃ飲めんわな」

「そうじゃろう…：どうじゃ儂の隣に来てボーイズトークといかんかの？」

この世界ではガールズトークがなくなってボーイズトークになってるんですね

「…ベルも一緒にいいか？」

「構わん」

それなら

「ベル！こっちに来いよ」

「あ、う、うん！」

とまあ冒頭に至るわけです

「それで、本当にお主は農らのファミリアの入るのかの？」

「ああ、ベルをほっとけねえしな……まあ、やっぱ入るなら綺麗な女たちがいるところってのもあるがな」

中身は高校生ですからね。欲に忠実なんです

「…本当お主は神々と同じ視点を持つんじゃないやな」

「俺から言わせればなんでこんなに綺麗な人たちがいるのになんで罵倒を浴びせたりするのかかわからんがな」

……隣のベルから凄い負のオーラが出て、ロキファミリアの方々が頬を染めてる気がするが……俺はタラシではない！トラブルな主人公や某ロボットの機体通称ISに乗って戦うハーレム王や不幸な幻想殺しの男みたいにはならんぞ！（もう手遅れ）

「…ま、お主がそうなら別に良いがの……ああ、それと入団するならその白髪の子はロキが直々勧誘したから入団試験はないが、おそらくお主にはあるぞ」

ん？入団試験？

「入団試験というのは、まあ……農ら幹部か団長と戦ってお主の実力を見せればいい」

「…ほう？……そりゃいい！ミノタウロスじゃ面白くなかったからな。レベル5や6と戦えるんなら俺は嬉しいぞ！」

「「「は？」」」」

……ん？俺なんか変なこと言ったか？

「君は……ミノタウロスを倒したの？……恩恵も刻んでないのに」

ん？アイズが質問してきたが……ああ、そうだった、恩恵刻んでない人間は弱いんだっただけ

「と言っても地上のミノタウロスだがな。武器もなかったから殴って殺したが」

「な、殴って？」

「YES……走って背後に回って頭殴って脳を揺らして、その後はただ殴りまくっただけ……普通に弱かったんだが、まあ地上の魔物やからあんなもんだろなと思う」

「「「……………」」」」

……あれ？変な事言った？

「いや、いやいやいや…普通そんな事無理だからね？」

いや、うんまあ普通の人だと無理だろうな。俺の体って不死性あるから死なないんだよなあ…弱点のアキレス腱の事は誰も知らないだろうしな

「ま、俺が普通じゃなかったという事で」

事実だしな。うん、嘘は言っていない

「……なんというか、凄い人が入ってくるんだね」

「ん？まだ絶対に入れるとは決まってるないだろ？」

「いや、君だったら僕でも苦戦しそうだ」

お？团长自ら相手してくれるのか、確かフィンも得物は槍だったから……ふむ。これはいい経験になりそうだ

あれ？今更だが、俺ってこんな性格だったっけ？……もしかして精神が肉体に引っ張られてる？……やだ、最後は『アタランテエエエエ!!』って言って死んじゃう？…それだけは阻止しなくては！

「おいおい、俺はただの恩恵刻んでないと一般人（逸般人）だぜ？」

「嘘は良くないよ？…さっきガレスに向けて少しだけ敵意を向けたけど…それだけでほら…僕の指が」

フィンがそう言って指を見せると親指が青く変色してプルプルと震えていた

「僕も初めてだよ。こんなに僕の指が反応するなんて……君は一体…何者かな？」

「……ただの人間だ」

「嘘は良くないで？」

「!!？」

「…ロキ、起きていたのか」

あちやく…そうだった、神は嘘が見抜けるんだったな…このタイム
ングでロキが起きたのは完全に不味いな

「さっき起きたんや…で、本当はあんた…何もなんや?」

はあ…どうやら他の客はミアさんが気を使って追い出したようだ、
今店にいるのは俺、ベル、ロキファミリア豊饒の女主人の人たち…
全員が俺に向けて視線を向けている…だが、転生者である事は隠さ
ないとな

「……しょうがねえな…俺はアキレウス…これでも英雄と呼ばれて
る」

俺がそう発言すると、全員が目を見開いた

「英…雄?」

「ああ、『駿足』のアキレウスって言ってな。これでも誰よりも何より
も疾いと自負してるぜ…ま、戦車も槍も盾もないから幾分か弱く
なってるがな」

「」「」「………」「」「」

「…嘘は…言ってないな」

「そういう事だから、ロキファミリアに入った時はベル共々よろしく
!」

これが、未来のロキファミリア所属の『英雄』とロキファミリアの
者たちの邂逅だった

「………僕も…レウスと同じくらい…横に並ぶくらい…強くならなく

ち
や
「

女だらけのファミリアに入るのは間違っている

ロキファミリアの者たちと豊饒の女主人で飲んだ翌日

「よし、これでいいな」

毎日の日課（昨日から）を終わらせ宿に入るとベルは準備ができており

「それじゃアレウス。行こうか？」

「おう…さて、ロキファミリア団長がどれほど強いのかねえ…」

宿を後にし、黄昏の館に向けて歩き出した

そういえば戦闘関連とかになると精神が体に引っ張られてる。

まあ戦うの楽しいからいいんだけどね（↑末期間近）

《黄昏の館》

……館とか言いながらもはや城なんだよなあ…でも黄昏の城って某クラフターのゲームの黄昏の世界のあの城を思い浮かべるんだよなあ……なんだっけ？盾持ってて球飛ばしてくる骨野郎……まあいや

「…大つきい…」

「ああ、本当でさえ」

「あ、あのお？」

ん？…あ、門番か…やだこの子も美少女やん。おのれロキ！浦山けしからん!!

「えつとだな…今日入団試験を受けに来たもんだが…」

「え!?!男の人だったんですか!?!」

ま、この世界のロキファミリアに入るのとは大概が（俺からしたら）美女少女ばかりだからな。つまり男は寄ってこない

「そうだぜ…で、入れんのか？」

「あ、はい！大丈夫です！」

門番の許可をもらい中に入ると、既に俺が来ているのがわかったのか、昨日会った面々とロキファミアの団員達が見物しに来いた

「やあ、よく来たね……それじゃあ、早速だけど……やろうか？」

そういいながらフィンは訓練用の槍を回転させて両手で持つて構えた

「…俺、武器ねえんだが？」

「あ、そうだったね。それじゃあその樽に入ってる訓練用の武器を使つて」

「了解」

樽の中には槍、斧、剣、ナイフなど様々な武器が入っていた、俺はその中から2本の槍とを取り気づかれぬ程度に魔力を僅かに込めた後、近場に1つを地面に突き刺した

「ん？2つも武器を使うのかい？」

「ま、これは予備みたいなものだ……この槍がどこまでもつかかわらねえからな」

「なるほど……さて……行くよ！」

「おう！立ち塞がってみろ！」

まずは小手調べだ

「せりやあ!!」

f g oのQuickモーションと同じ突きを放つ

「ツ!?!はあ！」

ガキン!!

「いいねえ！それじゃあこれはどうだ！」

駿足を生かしフィンの真上に来ると、踵落としをする

「速い!?!」

ドゴーン!!

踵落として地盤が壊れ小さなクレーターができる

「やられてばかりじゃないよ！せい！」

フィスがLevel6の身体能力を生かし、レウスに素早い突きを

放つ

「遅いんだよ!!」

難なくレウスは全てを躲し、蹴りを放つ

「ガハ!」

蹴られたフィンは空中を舞うが体制を立て直す

「どりゃあー!」

空中ということは無防備だということ、そんな隙を見逃さずレウスは槍を投擲する

「んな?!はああ!」

無理矢理体を動かし得物でなんとか投擲された槍を受け流す。そして武器を持つていないレウスにフィンは突撃する

「槍を投げるなんて、隙を晒すにも程があるんじゃないか?」

あと少しで槍がレウスに届くというところに

「レウス!」

ベルが悲痛な声を上げる

「…誰が隙を晒しただって? (アポーツ)」

地面に突き刺していた槍が勝手に動きレウスの腕に収まった

「なっ!」

流石のフィンも予想外だった、いや誰でも予想外だろう。恩恵を刻まないと魔法は発現しない。なのにレウスはできた

「魔法名を唱えない魔法だど!」

魔法に一番精通しているリヴェリアでもつても無詠唱どころか魔法名を唱えない魔法は知らない

「隙だらけだぜ!」

レウスは体に刻み込まれた槍術でフィンの槍を弾いた後、突きと槍の先で斬るように槍を操り腕の筋肉の繊維を斬る

「グッ!……はあ…降参だ」

レウスの間合から後退して避けたフィンは手を挙げた

「あ?おいおい、まだ始まったばかりだぞ?もつとやろうぜ」

本人は気づいてないが、完全に戦闘狂になっている。流石の人生の半分を戦いに明け暮れた英雄の肉体

「いや、流石にこれ以上は僕も辛い…それにさつき斬られたところのせいで槍を持つのがかなりきつい…：本当に恩恵を刻んでないのか疑問に思ってたよ…流石は英雄といったところかな」

「(本人ではないがな)…いや、あんたこそかなり強かったな。いい経験になった、また相手してくれ」

「やれやれ、しょうがない。…さて、それじゃあ結果を発表するよ」

「」「……………」

「……………合格」

ワアアアアアアア!!!

突如、見物していた者たちが歓声を上げた

「ふう、良かったぜ」

「おめでどうレウス！」

物思いにふけているとベルが飛び込んで来た

「おっと、どうだ？ちゃんと合格しただろ？」

「うん！」

抱きついたベルを俺が軽く抱きしめっていると、ロキファミリアの幹部とポーシオンを飲み傷を治した団長達が来た

「合格したのおレウス」

先ずはガレスからお祝いの言葉いただき、他の幹部達からもお祝いの言葉をいただいた、ベートがそっぽを向きながら祝ってきたが、耳はせわしなく動き、尻尾は左右に揺れていた

「……………レウス」

「ん？アイズか…しかもその呼び名」

「あ…えっと、ダメ…だった？」

いや、そんな暗くならんくても

「いや、呼び名は別にいいし、好きに呼んでくれ…それでなんか用があつたんじゃないのか？」

今更だが、ここまで原作キャラと関わっていいのだろうか？…………いや、そもそも原作が既に破壊してたわ

「良かった…………その…なんで、そんなに強いのか？」

……あ、やべ…原作でもアイズって強さを求めてるじゃん…まじくね？目を付けられたじゃん…しかも強いっていつてもそれはこの肉体と肉体に刻み込まれた知識と技術だしなあ。肉体に刻み込むって変な話だけど、アキレウスのケイローンからの訓練内容があれだから頭で考えるより体をすぐに動かせるようにしたんだろうなあ

「……まあ…地獄（訓練）を潜り抜けてきたから？」

「「地獄？」」

「ああ、あれは地獄だった」

いやだつてこの体が震えてるもん…一体どんな訓練をしたんだケイローン先生！

しみりしている俺を見てこれ以上は藪だと思ったのかこれ以上は追求してこなかった

「…んん！きて、それじゃあロキのところに行こうか」
「おう」

そのままベルと幹部達と何故かついてきた団員達を連れてロキの部屋に向かった

「ロキ？」

「開いとるで〜」

「それじゃあ行こうか…君たちはダメだよ？」

ええええ〜。ブウウウウ〜

そのままフィンやガレス達を連れてロキの部屋に入った

「準備はできとるで、ほなやろうか」

「ん？恩恵を刻む時は誰にも見せてはいけないんじゃないのか？」

「んな固いこと言うなや。これから家族になるんやから」

「まあ、いいか…やばいもん恐らくあるけどな」

「え？どう言うことですか？」

レフィーヤが質問してきた…あれ？君って幹部じゃないよね？
なんでいるの？

「ま、それは恩恵刻めばわかるだろ…きて、刻んでくれ」

俺はロキに促されベッドにうつ伏せになった

「うわ、凄い」／／

「どんな訓練したらあんな体に」／／
「「ツ〜!」」／／

……すんごい気まずい……

「……んん……ほな刻みで」

俺の背中にロキが自身の血を垂らし俺の背中が光り輝いて恩恵が刻まれた

「うん。刻めた………は？……はあああああ!!!?」

「ど、どうしたロキ?」

「なんやこれ!?なんなんやこれ!?あんだ凄すぎにも程があるで!」
全員が不審に思い。レウスの背中を除くとそこには

アキレウス

Lv. 1 (十?)

力：0

耐久：0

器用：0

敏捷：0

魔力：0

《発展アビリテイ》

駿足：S

英雄：B

槍兵：B

騎乗：A+

神性：C

対魔力：C

《魔法》

【我が手に^{アホーッ}】

- ・ 魔力を込めた物を自身の手引き寄せる
- ・ 魔力を込めた量により物の硬さに補正がかかる
- ・ 無詠唱、魔法名を唱えなくて良い

□

□

《スキル》

【勇猛】

- ・ 精神干渉を全て防ぐ
- ・ 戦闘時にステータス補正

【戦闘続行】

- ・ 致命傷を受けても一度だけ耐える

ドロメウス・コメーテリス
【彗星走法】

- ・ 何よりも誰よりも疾い
- ・ 敏捷に超高補正
- ・ 弱点を露出してしまう 《デメリット》

アンドレアス・アマラントス
【勇者の不凋花】

- ・ 不死の肉体
- ・ 一部の行為には発動しない 《デメリット》
- ・ 弱点を貫かれると上のスキルと共にこのスキルは消失する 《デメリット》

リット》

【英雄威光】

- ・ 英雄の中の英雄
- ・ 全ステータスに高補正

「「「「「な!!?」」」」」

「やっぱ出るよなあ」

「…本当に英雄やったんやな。しかもこの不死の肉体って」

「文字通りだ、俺の弱点を貫かないと俺にダメージを与える方法はない」

「少ないって言うことは他にもあるんやな?」

「おう、相手が神性を持っているか、神が造った武器でしか俺に傷をつけることはできない」

「……はあ…規格外にも程があるで」

「ま、それが俺だからな。ということ、これからよろしく」

ロキフアミリアに加入
あ、ベルは物の見事に何もなかった

レウス達がロキの部屋を後にした後、ロキは

「レウスもレウスでベルもベルやな」

【情景英雄】

・早熟する

・想いが続く限り効果は持続

・想いの丈により効果上昇

・英雄からの情愛によりステータス高補正

【英雄の隣に立つ為に】

・早熟する

・英雄と同等の強さになった時このスキルは消失する

流星にまざいと思つたロキは急いでベルのスキルを写した紙から

この2つを消した

「……荒れるで……世界が」

英雄が現れたことにより世界は激震する

さあ、ピースは揃つた

新しい時代の幕開けだ

新しい世代の物語の始まりだ

新しい神話の

開幕だ

幕間1

どうも皆さんこんにちは、最近気づいたんだが…俺6アキレウス4の割合って感じになってるアキレウスだよ！

いやあ、おかげで美女を見るとつい反応して目で追ってしまう…そういうえば英雄のアキレウスも好きなものの中に美女ってあったもんな…英雄色を好む…いや、なんか違うな

しかもだ！フィンの時に気づいたが、戦闘になると完全に英雄アキレウスみたいになる…まあ、これはこれでいいんだけどね。逆に考えればそう簡単には死なないし

で、今俺がなにしているかと言うと

「そ、それで！龍になった人はどうなったんですか?!」

「うんうん！英雄の力を受け継いで、英雄達を倒して、大聖杯っていう魔道具を誰の手にも届かないところまで運んだ後はどうなったんの?!」

「…竜殺しの英雄…：バルムンク…」

「槍使い…：君と施しの英雄…」

「一体どんな魔法を使ったんだ、その女帝は…要塞を浮かばせるなど、そんな魔法を知らないぞ私は…」

「ガハハハ！そんな英雄がおったのか、レウスがいたところは」

「俊足の乙女…：そいつと同じくらいに強くなれば…俺は…」

ロキ・ファミアアの奴らに英雄譚を話してた、正確には聖杯大戦だが

「うちもそんな英雄がいたとは知らなかったは…：それ以上に…」

「…」

そう、俺は言ってしまったんだ、家族になってくれたんなら秘密は無しだと思い

「レウスが別の世界の人間だったとはな…：そして、そんな英雄達の殺し合いをしていたなんて」

魂は俺だが肉体はアキレウス冒頭でも話したように4割はアキレウス…：ほらな嘘はついてない（暴論）

「まあな……まあ、色々あったが、今この時が幸せだから気にしてないぜ」

色々原作崩壊してるから原作と同じ事が起きるかはわからんが、ベルという可愛い彼女もいるロキファミリアの者達家族がいる。ロキという母がいる……これ以上望むのは天罰が下りそうだ

「……そうか……」

「」「」「……」「」

……ああもう！んなしみつたれた雰囲気は嫌いなんだよ！

「思い詰めんなよ。確かに俺はあの時死んだ、だからこそここに俺がいる。お前達に会えた、お前達の家族になれた、それでいいじゃねえか」

「…そうだね。当人がそう言ってるんだ、僕たちが思いつめたところで何か変わるというわけじゃない。それに彼が言ったように僕たちは家族だ、家族なら励まし、助け合い、愛情を…それが僕たちだ」

「そうじゃな……それじゃアレウス！酒を飲むぞ！儂の秘蔵の酒を出してやるぞ！」

これだ、家族ならこんな風に暖かく、楽しい空間こそが…一番の家族としての理想だ

「おう！」

「んな!?ガレス！そんな酒あったんならなんでうちに出さんのや！」

「ロキに出したら全部飲まれるからの」

「ひどい！」

「ガレス、ロキも入れようぜ」

「ああ…神や…神がおる…」

半分神ですけど

「なんでじゃ？」

「飯や酒はみんなと飲むと美味しいぞ、1人で飲むよりみんなと飲んだ方が絶対美味しい」

「……それもそうじゃの…じゃが！ロキはちゃんと飲む量を抑えてもらうぞ」

「わかつとる…ありがとなレウス」

「気にすんな母さん」

「「「!!?」」」」

「グハア!?……も、もう一度」

「?……母さん」

「……うち、もう死んでもええわ……」

ハアア?!?!なんかロキが天に浮かび上がっていく!?!

「待て!?!どこ行く気だ母さん!」

うおおお!!?!?!なんか更に天に浮かび上がっていく力が強くなったぞ!?!

「レウス!ロキに天に行くならもう二度と呼ばないぞと言うんだ!」

フィン……

「行くならもう二度と母さんと呼ばねえぞ!」

スタ↑ロキが地に足をつけた音

「はい!どこにも行かんで!だからワンモアプリーズ!」

以下、同じ下りが何度も続いた

「ハアア……」

俺は今、とても疲れてる……ロキが天に還る件の翌日からリヴェエリアが俺にダンジョンの知識を教えてくれた……だが……

「内容がスパルタすぎる……ケイローン先生とまではいかないが、同じ人種の匂いがする」

とにかくきつい……間違えればあの杖で叩かれ、正解すれば休憩無しに次の問題と知識を叩き込む……

「だが、昨日!とうとう終わった!明日から本格的にダンジョンに潜

るぞ！」

時は満ちた

我！ダンジョンに突入せん！

大和魂を見せてやる！行くぞお！おおおおおお！！

「さて、この問題が全て解ければダンジョンに潜る許可を出す」

そう言つて積み重なれた紙、紙、紙、紙、紙、紙、紙、紙

ん？なんか、積み重なれた紙の山の中に一緒に朱い髪と手が見えたが…気のせいだなうん！何処かの神が酒でも飲んで倒れてるんだろ！うん！俺は知らん！

だが！！そんなことより！！これだけ言わせる！！

「…ガッデム！！」

ソロモンよ！私は帰ってきたああ！！（勉強から）

「あ、レウス！終わったの？」

ああ、俺のマイエンジェルが俺に前にいるんじやあ

「…：おう、終わったぜ、ベルはもう登録してきたのか？」

「ううん、レウスが終わるまで待つてたんだ」

これが！できる女！前世ではこんな女性画面の中にしかいなかったぞ！

「本当…俺には勿体無いほどいい子だなベルは」

そう言つて俺たちは門の前で待っているリヴェリアの元に歩いた

「うん…絶対に僕は離れないからねレウス…僕だけの英雄さん」

「テヘー！ダンジョンのこと教えるついでにこの世界の男性の希少性と女の狂暴性をおしえちやった！したらレウスには絶対に手を出させないっていう考えになっちゃった」

「なにやってんだテイオナアアアアア!!!?」

悲報！ベルきゅんヤンデレ属性（微）取得！

俺の彼女がヤンデレとか…：まあ、きよひーほどじゃなければいいか

視線が野獣の目なのは間違っている

はーい、皆さーん。私は今どこにいるでしょーか?!

こっここでーす!こっこここ!私は今、冒険者ギルドに来ています。
え?ベルがヤンデレ化してた?な、何を言ってるんだ!俺のマイエ
ンジェルベルがヤンデレになるわけないだろお!!?
……うん、でも、ベルのヤンデレを見てみたいという俺もいるが:
まあ、ここは気を取り直して……

たちけて……(泣)

視線が!視線があ!見ろ!……あ、画面の前のみんなは見えないね。
説明すると……皆さんは何日も食べていない肉食獣の目を見たこと
あるかい?俺はある。凄いんだぜ?肉を少し出したら突撃して来や
がったんだ、生きた心地がしなかったぜ……おっと、ズレた、で周り
の目がそれなんですよ!怖い!寒気が!これに耐えらるのはただの
馬鹿か、ハーレム願望の男だけだね!しかも聞いて!このセリフ!

「男よ!しかもイケメン!」

「いいなあ。私もあんな人と付き合いたい」

「無理でしょ……でも、あの人リヴェリア様と白髪の子を連れてるし
……」

と、ここまでいい。少し気分が良くなった途端に……

「ウホ!あのイケメンの息子♂で貫かれない!」

「いいや!私はあの人をp r p rしたい!」

「馬鹿!抱きつかれるのがいいんでしょう!」

なんだ、少しはマシな人いるじゃん

「その後、お持ち帰りしてくんずほぐれつするのよ！」

ブルータス！お前もか！？」

とまあ、こんな感じで酷いので、その場で俺をお持ち帰ろうとしていたこの世界では美しい人もいました

いや、あれは恐怖だ……前世の記憶がある分、油まみれで涎垂らしながら俺に迫ってくるのは恐怖でしかない!!!てか、本当この世界の男の感性がわからん!!あんな耐えられんわ!!!

まあ、何故かいつのまにかいたアイズの魔法で吹っ飛ばされたが……うん、本当感謝してます。ベルが天使なら貴方は戦乙女ですね！

え？リヴェリア？……ママでしょ？レフィーヤ？妹ですね

ロキ？お母さん……あ、母が2人いる……リヴェリアは聖母で！

ベート？……頼りになる姉御的な？口悪いけど……

フィン？……年齢的にはお母さんでもおかしくn……ツ!?殺気が！

ガレスさんは親方だ！異論は認めん！

いや……本当……俺、この世界で無事に生きていけるかなあ？ダンジョンの魔物じゃなくて女に殺されそう……

あ、ベルが頭を撫でようと背伸びして手を伸ばしてる……可愛い……少しがんで……うん、ありがとう

とまあ、なんだかんだでギルドに到着……うむ。アニメでも見たがやっぱりデカイ……

そして、入った瞬間俺に向けられる視線……喋るときはアキレウスのような口調になって俺の言葉を発するけど、中身は俺だからこういうのは無理！例えるなら小学生が転校して来た子を見るような目……より酷いなうん

そして、リヴェリアとアイズに連れられてギルドのカウンターに「すまないがエイナはいるか？」

……あ、そういえば原作でもリヴェリアとエイナは知人だったっけ？

……この世界だと苦勞してるんだらうなあエイナさん

「あ、はい！ただいま……で、ですのでこれで失礼します！神……！」

あーうん…苦勞してたね神々で。容姿関連のことじゃなくて…いや、まあ言いよつてた神々も容姿に惹かれたんだろうけど…ふむ。今度男神達で話し合うとしようか…あ、羨ましがられて呪われそう「えっと、リヴェリア様?どう言っただご用件でしょうか?」

「エイナ。様はいらないと云つてるだろう。私はもうエルフの王族ではないのだ…」

「そ、そんな畏れ多いことは流石に…ん?」

ん?なんか見られてる…手を振って見るか…ノシ

「え?…男?…り、リヴェリア様?この方は?」

「最近、ファミリアに加入したアキレウスだ、そして同じく加入したベル…この2人を冒険者登録しに来たのだ」

「え?ほ、本当ですか?!リヴェリア様のファミリアに!」

そうだ!ロキファミリアの2番目の男だぞ!なのでそんなに視線を集めるような大声を出さないください。さつきより視線が凄いです。職員までも俺に視線向けてるし…俺ナルシストじゃないので、こんなの無理です。胃がキリキリしてきた…

「あ、えっと…ゴホン!…ではこの紙にお名前と所属ファミリアを記入してください」

さすが出来る女!一瞬で平常心になり義務を始める!そこに痺れる憧れるう!全く!街で出会った人達もエイナさんを見ならぬさい!

「…:はい、アキレウスさんにベルさんですね…アキレウスつと…んんん?変だなあ?突然手帳を出して何か記入したぞお?…ま、まああれだな!仕事だからこう、なんか記入するのがあったんだよ!うん!きつとそうだ!

「では、ギルドから支給する武器があるのですが、なんにしますか?」
「あ、それはいい。この後、ヘファイストスファミリアに出向くのでな」

「そうですか…ダンジョンの知識も…リヴェリア様が教えるはずでしたね」

「うむ…ああそうだアイス。レウス達をヘファイストスファミリアに

連れて行っておいでくれ。私はエイナと話すことがあるのでな」

「うん、わかった…行こう?」

あ、ちよー!手引つ張らないで、自分で歩けるから!

「あ、待ってよ〜!」

へフアイストスファミアに行く途中、アイズが絶賛するジャガ丸くんを食べながら向かう…視線は気にしなればどうということはない……というのは流石に無理だったので、ベルが気を遣って腕を抱きしめてくれました…うむ。視線が多少減ったぞ、ベルへの嫉妬と殺意があったので、俺からも少し殺気を放ったら離れていったが……いや、あの…なんでアイズも手を組むの?…え?2人ですれば倍になる?…なる…のかなあ?…まあ、いや、嫌な気持ちじゃないし

「…あ、そうだった、金はどうするんだ?俺たちはそこまで金は持っていないぞ?」

「それなら大丈夫。フィンから幾らか貰ってる。足りなくなったら私が払うから」

むう…そのセリフは男である俺が言いたかった…いつか言ってる

「そうか…ありがとな」

「…大丈夫…私もレウスと一緒にだから嬉しい」

「むうー」プクー

ベルって怒ると頬を膨らませるんだね……まあ、そこがまた可愛いんだけど……頭を撫でると顔をにへらくって感じな顔をして、アイズもして欲しそうにジーンと見てたんでアイズも撫でた

それでまあアイズが街並みを説明しながらへフアイストスファミアに到着したんだが

「そこに兄ちゃん私の武器買ってかない！」

「何言ってるんだ！そのあんちゃんはおんをかうんだよ！」

ただ今なぜか俺に武器を買わせようとする人が多発してます。

やめて！俺にお金はないの！アイズが買ってってくれるんだよ！ヒモじやん!？」

「…あー、すまん。俺は自身の目で武器を見たいんだ、また後にしてくれ」

すると、渋々だが、引き下がっていったが、今度は誰が武器が並べられてるところまで連れて行くかで口論になった

「レウスは私が連れて行くから問題ない」

アイズが少し不機嫌そうに言うと、アイズに少し敵意を向けたが、敵わないと悟ったのか店の中に入っていた

……ねえ…もしかして外に出る度にこんなのが起きるの?……胃がああああ!!!胃薬をくれえ!ミアハファミリアに後で行こう…ミアハ様は女になってないよな!?名前的に女でもおかしくない名前だし……いや、なってるわけないかあ。あははは(フラグ)

それで、一階づつ見て回ったわけだが

「……はあ」

コレ!と行ったものがなかった……いい武器はあったんだが、なんか足りない気がしたんだよ

「大丈夫?」

「ああ、すまん。わざわざ一緒に見てくれたのに」

「ううん。自分に合う武器を見つけないのは難しいから…私もゴブニユに頼んで、やっと見つけたのがこれだから」

そう言ってアイズは腰にあるデスペレートを指した

「そうか……ベルはいいのは見つけたか?」

「うん…これなんだけど」

そう言っベルは手に持った白いライトアーマーと刃渡り30cmのナイフを見せた

……待って、そのライトアーマーどう見てもピョン吉だよな!?!ナイフの名前は?…ヘビチン!?!流石ヴェルフ…すごい名前だ…でも…そ

こちらの武具より良いってのはわかる。これが魂を込めた武具か、他の武具にはない何かがある

「良いんじゃないか？名前はあれだが、他の武具より性能は良い」

「うん。私もそう思う」

ベルは速さが売りだからな……あ、俺もそうか……さて

「そこに隠れてる神……出てきな」

「ッ!？」

ベルとアイズが不思議そうに首を傾げた後、部屋の入り口から紅い神で眼帯をした女神へファイストスが入ってきた

「驚いたわ。まさか私に気付くなんて」

「さつきから俺にずっと視線を向けられてたら嫌でも気付く……それで、なんか用か？」

「ええ……貴方に見てもらいたいものがあるのよ」

へファイストスが自ら出向いて冒険者になったばかりの俺に見せたいもの？

「ああ、いいぜ」

そのまんま俺たちはバベルの塔を出て、へファイストスファミリアのホームに入りへファイストスの部屋らしきところに入った

「で？何を見せたいんだ？」

「少し待ってて」

そう言ってへファイストスは奥の部屋に入って行った

「待たせたわね……貴方に見せたいものはこれよ」

「な!？それは!？」

あり得ない!それがあるのはあり得ない!だってそれは!

デ
イ
ア
ト
レ
コ
ー
ン
・
ア
ス
テ
ー
ル
・
ロ
ン
ケ
ー
イ
宙
駆
け
る
星
の
穂
先

大英雄アキレウスの愛用の槍なんだから

鍛冶神を専属鍛冶師にするのは間違っているだろうか

「そうなのよー！神界じゃその子はいっつもダラダラとして！仕事を私に押し付けるのよ！だから！私は降りてきて、あの子に仕事の辛さを教えるためにあの子の側から離れたの！」

「そんな神もいるのか…名前は何？」

「ヘステイアよ」

あ、ヘステイアって降りてきてないのね

……ん？おや…どうも諸君！毎度お馴染みアキレウスだ！

え？槍の件はどうしたって？貰いましたよ。え？なんで貰ったかだって？いや、なんでもあの槍なんですけど、作ったはいいけど誰にも扱えないらしいんですよ。正確には人には使えない…俺はほん半分神じゃん？だから使えたということですよ

え？じゃあなんでヘファイストスがわざわざお前の前に現れたかだって？なんでも気が向いてバベルの塔に行っていたら俺を見かけて、神の直感的なものでこの槍を俺にくれたらしい。まあもちろんお金は払ったけどね（俺が払ったとは言っていない）

金額にして5000万ヴァリス

ヘステイアナイフが2億にしたら随分安いもんだ

まあそんな金額をアイズが持っているわけ無く、交渉の未分割払いになりました

……アイズには本当…世話になってばかりだな……なにか俺にできることがあるならしたいんだが……え？鍛えて欲しい？ん……俺が使うの槍なんだが…まあ、できる限りやってみるよ

待って、頬を染めながら「2人きり……」とか言わないで！緊張しちゃうでしょ!!

「あ、それならレウス」

おっと、アイズと話していたらヘファイストスが話しかけてきたぞ「どうした？」

「その槍と一緒にこれもあげる」

そう言つて渡してきたのは銀色で装甲が薄く、肩にも装甲がある鎧と、二の腕から掌まで螺旋を刻むような形をした防具……というほど守る部分は少ないが……うん……てかどう見てもアキレウスが着ていた鎧だね！FGO民的に言うなら第二再臨の姿

「いいの？金はねえぞ？」

「いいのよ。その槍を使える人に一緒に渡す予定だったものだし」

「いや、だが……」

「……そうね……なら、たまにでいいからここに来て私の話し相手になつてくれないかしら？」

「そんなことでもいいの？」

「ええ……実はやることなくて暇なのよね。バベルの塔にいたのは暇だったから子供達がどんな武器を打ったのか見たいってのもあつたけど……それに……貴方みたいな色男とお話するだけで私は満足よ」

「……なあ、ヘファイストス」

「なにかしら？」

この世界だと美しいものは醜いものに醜いものは美しいものに……つまり人々からしたらヘファイストスの右眼は何よりも美しいものに見えるはずだ

「気になつたんだが……ヘファイストスは右眼を……どう思つてるんだ？」

「ッ……そうね……子供たちからはとても美しいって言われるけど、私からしたらこれはとても……悲しくて辛くて……醜いわ……」

「そうか……あなたの右眼が醜いだとか美しいだとか俺はそんなありきたりのことは言わねえ……」

「……」

「ただ、これだけは言わせてもらう……あなたはあんだだ」

「……」

「その右眼もあなたの体の一部だ、それを本人が憎もうが嘆こうが俺は知つたことじゃない……俺だつて体の一部が憎い……それが無ければ俺はあの戦いで姉貴をもつとマシな救い方があつたかもしれない

……だがな…俺はその一部が憎いと同時にとても素晴らしいもの
に思える」

……なんか、俺が考えてることとは少し違う言葉が出てくる……も
しかして、アキレウス本人の思いと俺の考えが混ざったのか？……
ま、今は俺の肉体と同時にアキレウスの肉体だ、有効利用させてもら
うぜ、それが1人の女性の悩みを少しは救う事が出来るならな…

「この世に完璧なものはない。万能の人だって、ただそこらの奴らよ
りできることが多いだけ、天才と呼ばれるやつでも何かしらの欠点
がある。欠点がないと言われる人でもただ人々が気づいていないだけ
で何かしらある……俺にだって俺の体を傷つけるやつはほとんどい
ない。だが俺はそれがとても好ましい。いつか俺を傷を与えること
のできる奴。俺の体の特性を打ち消す事ができる奴を俺は会って来
た……つまりそれを発見、見抜き、打ち勝つものは必ず現れるよう
にあんたの右眼が醜かろうが、美しかろうがあんたの全てを愛してくれ
るやつは必ず現れる。俺を愛してくれる人もいるんだからな」

そう言つて俺は部屋にある武器をアイズと一緒に眺めてるベルを
見つめる

「………貴方は…違うの？」

「会ったばかりの人を愛するほど人に飢えてないんでな……だが…あ
んたと話していく中で、あんたを愛するかもな」

「………」

「だが、今は俺からしたらあんたのことはとても好ましい。この槍に
しつかりとした信念、情熱、魂、熱心、愛情、色々な想いを込めなが
ら打ち、自身の眷属を心から愛してるあんたのことはとても魅力的
だ」

「ッ………そう…面と向かってそんなこと言われたのは初めてだわ…」

………だいぶ熱くなつて言っちゃまったな。初対面の人にこんな事
言ったら嫌われるな…せめて今の言葉を頭の片隅にでも置いてくれ
ればいいが

「………気が変わったわ」

ほら、もう二度と私の前に合わないでつて言われるんだろうなあ

「たまにじゃなくて、頻繁に来て」

ほら、来ないd……ん？

「……は？」

「あら？聞こえなかった？たまにじゃなくて、頻繁に来て欲しいのよ。私の初めてを奪ったんだからこれぐらいしてもらわなきゃ」

やだ、女性の口から初めてと言うと、意味深に聞こえる俺は腐つてますね

「わかんねえな。俺はあんたを侮辱するような事も言ったぞ？なぜあんたはそんな俺と頻繁に会いたいなんて言う？」

「あら？例えば？」

「醜いだとか美しいだとかのありきたりな事は言わねえってことつまり慰めもしなかった」

「むしろ私はそれが嬉しかったわ。美しいって言われたらこの右眼があるから心を痛めるし、醜いって言われたら私も女だから泣きそうになる……だけどレウスはそんな事言わなかった、私はそれがとても嬉しい」

「……あんたが嫌っている右眼を体の一部だとか」

「ええそうよ。私のこの右眼は私の一部……でも、貴方から言われるととても良いものに思えたの。それに貴方も体の一部に思うところがあるのでしよう？同じね、フフ」

「……会ったばかりの人を愛するほど人に飢えてないとか」

「むしろ普通でしょう？一目惚れなんてあるけど、相手がどんな人かもわからないのに愛するなんて私からしたら可笑しいわ……でも貴方は私と話して私の事を好ましい、魅力的って言ってくれた……とても嬉しかったわ」

……なるほど、そこらの人と同じと考えていたけど、相手はコンプレックスを抱えた女性……そんな人が他の人たちと同じ事を言っ嬉しいなんて言うわけもなく、かといって逆の事を言ったら思う事があるってわけか

「だから私は貴方と話がしたい……色々……ね」微笑み

……あ、これ……やばい奴だ……2日目のベルと似た顔してる

「で？言いたいことはあるかい？」

はい、ただいまへファイストスのところからベル達と一緒に帰ってきて、夕食を食べたら部屋にフィンが入ってきて説教されています

理由はやっぱりあの槍でした、まあ公には俺はLevel11：そんな俺にへファイストスが直々に打った槍と防具：どう考えても宝の持ち腐れと考えるのが普通ですよ

「いや、そのだな…あの槍はとても馴染むといふかなんといふか……」
「ん〜？」

「すまんかった」

「…はあ…まあ確かに自分に手に合う武器を使うのが普通だけど、だからといってまさかへファイストス製の武具なんて」

「大丈夫だ、自分の武具だから自分で払う」

「違う…そうじゃないんだよ。重要なのは」

…ん？……あ、もしかして、へファイストスを

「神へファイストスを専属鍛冶師にしたことなんだよ」

はい、おそらく俺が初めてであろう偉業。鍛冶神を専属鍛冶師にする。…いや、こんな重大なことだから公にはしませんよ？恐らくアイズカベルの口から漏れたんだろう。ロキや他の幹部達にも伝わってるかも

「はあ…胃が痛い」

良い胃薬を提供してくれそうな人紹介しましょうか？

「……君のせいなのに……じゃあ明日にでもそこに行こうか」

ウイッス

『いやだ！前にテイオナさん僕に布の薄い服を無理矢理着せたじゃないですか！』

ベルが言ってる布の薄い服とはアマゾネスが着るような大事なところだけを隠した服……服？……である

『ベルに似合うと思ったから着せたの！いいから早く行こ！』

『助けてレウス！』

……テイオナがコーディネートした服を着たベル
アマゾネス風の服

『ううう……恥ずかしいよお……』

モジモジして頬を赤らめながらこちらを見るベル
バニーガール風の服

『こ、これ服じゃないじゃん！』

そう言っつて胸を右手で、下を左手で隠すベル
メイド服

『お、おかえり……なさいませ。ご主人様……』

火が出そうなほど顔を赤くしたベル

水着

『こ、これ大丈夫？おかしくない？』

白を基調とした水着を着たベル

おっと、作者と俺の欲望が混じった妄想をしてしまった

『…頑張れ』

『そんなあ!?!』

そう言っつて連れて行かれるベル

『レウスう！楽しみにしててね！ベルを可愛くするから！』

『おう』

「ま、今は目の前の敵に集中するか」

そう言って現れたミノタウロス

「ダンジョン内でのミノタウロスはどれほど強いのか、お手並み拝見といくぜ！」

ブモオオオ!!

「パクリだが……」

その心臓（魔石）貫い受ける！」

そんなこんなで、一応保険としてアイズとレフィーヤを連れて、ど
んどん奥に行くことにした、道中ゴブリン、コボルト、フロツグシ
ューター、ウオーシャドウ、キラーアント、オーク、インファイトドラ
ゴン、ミノタウロス、ライガーファンクと前世で画面の中で見た魔物達
を倒していく

「こんなあっさりと17階層に来たの初めてです」

正直俺もこんなすぐにごここまで来れるとは思ってなかった、大英雄
アキレウスの肉体と技術やばすぎい、そしてヘファイストス様が作っ
たこの槍も手に馴染んで、扱いやすい

「うん…凄いな。私はLevel1の時、ここまで強くなかった……
ねえ…いつ鍛えてくれる？」

「え？鍛えてくれるってどういう事ですか？」

「ああ、それはなアイズが昨日、鍛え欲しいって言ったから鍛えてやる
んだよ」

「そうなんですか…」

……あれ？レフィーヤってアイズloveの百合っ子のはずだが
…男と2人つきりになったらめっちゃ怒りそうなんだが……あれえ
？

「それじゃあ、階層主がいる部屋まで行く」

アイズに促されゴライアスがいるところまで行く

「それじゃあ、手出しは無しで頼むぜ：俺はタイマンでやりたいからな」

壁に亀裂が入り、そこから黒いゴライアスが出てくる

「え？黒い：ゴライアス？」

「まさか、強化種!？」

……ちよいと俺、不幸すぎやしやせんかね？アキレウスって幸運Dで、ちよいと悪い程度だよ？いきなり階層主の強化種とかわるえん

「レウス、私も一緒に「いらねえ」：ええ？」

「この戦いは俺の戦争だ、手出しは無しって言ったろ？」

正直、怖い。不死身だけど、何かしらの不運でアキレス腱を攻撃されて不死性が無くなる可能性だつてある：それでも俺は大英雄アキレウスの肉体を得た人間なんだ、大英雄と同じ偉業くらい成したつていいだろ：槍でタイマンの空間を作るのもいいが、これは切り札だ、まだこの階層主で使うほどでもないし、敵が英雄ヘクトールのように逃げる訳じゃない……正面から戦つて勝利する。それが大英雄アキレウスの戦い方だ：全てをアキレウス本人と同じ行動はしねえがな。俺は俺だ、なら俺のやりたいようにやる。今回は正面から戦いたいだけだ

「…わかった……負けないでね？」

「勝つてくださいよ？」

「おう！俺は負けねえよ」

ゴオアアアアア!!!

そして、此方を敵と判断した黒いゴライアスが向かってくる

「行くゾオオオ!!!」

冒頭に戻る

硬い：原作ではベルの【英雄願望】^{アルゴノウト}で、体を吹き飛ばしていたが、今の俺にそんな高火力のスキルはない……だったら……

「硬いんだったら、壊れるまで攻撃するだけだ！」

ゴガアアア!!!

片目を失い、痛みと怒りで我武者羅に攻撃してくるが、でかい凶体のせいで動きが幾分か遅い、そして俺は駿足のアキレウスと呼ばれるほど速い大英雄の能力を持つてるんだ、その程度じゃ俺を攻撃することはできねえよ！

「せりゃあああ!!!」

残った片目も貫こうとしたら、ゴライアスはその巨体を横に転がして避けた、これは流石に予想外で、空中で無防備になったところを豪腕が飛んで来たが、なんとか体を捻ってゴライアスの腕に着地し、腕を駆け上がって行く

ゴオアアアア!!

「こんなところで、足を止められるかあ!!!」

まだまだ、この程度の相手に手こずるほどアキレウスは弱くない！
駿足を生かして、貫通力を上げる！

ゴア!?

もつと、もつと速く！

「速い……目で追えない……」

ただ、緑色の光のようなのが、糸を引くように動き回ってる。レウスは見えない……

「なんで……そんなに速いの……なんで、そんなに強いのか？」

知りたい、レウスがどうやって力を身につけたか、なんでそんなに強くなれたのか

隣にいるレフィーヤもジッと魅入るように見てる。目で追えないだろうけど、見逃すまいと、ジツと……

そして、緑色の光がゴライアスに突き進む

「オラアアアアアアア!!!」

ゴオガアアア!!?

硬い体に槍を突き刺し、少しずつ槍が食い込む……そして

「これで！終わりだああ!!!」

まるで、エメラルド色に輝く槍が黒いゴライアスの硬い皮膚を貫いた

ゴオア……アア……

灰となった黒いゴライアス、魔石が砕けた拍子に出た、紫色の粉末がその下にいるアキレウスの身に降りかかる

そして、アキレウスはアイズ達の方を向き

「な？……勝てただろ？」

ニツと笑った

「君は！どうしてそう無茶をするのかなあ?!」

昨日と同じように普通の人がやらないような事をした、レウスがロキの部屋で正座をさせられフィンに叱られていた、今回はそれを止めなかったアイズとレフィーヤも軽くリヴェリアに叱られ、今この部屋では主神、団長、副団長、幹部、ベルが揃っている

「はい、本当にすまんかった、自分がどれだけできるか確かめたかった、反省はしてる。後悔はしていない」

ゴツン！

流石に起こったフィンがレウスの頭に拳を落とした

「うぐあ!？」

流石Level6、くそいてえ

「僕たちも心配したんだよ?…それに…」

フィンはベルの方を見ると

「……………」

目に涙を溜めて、レウスを見つめるベル

「ほら、僕たちよりあの子に言うことがあるんじゃないかな?」

「…ああ」

「……………」

「その…だな…すまなかった」

俺にはわからねえが、大事な人が亡くなるかもしれないんだから、かなり辛かったんだよな…

「…もう二度と…こんな無茶はしないで」

「わかった…：本当にすまなかつた」

「うん…置いていかれるのはもう…嫌だから」

「ああ、置いていかねえよ…ずっと一緒だ」

「なら…許す…：勝手に行かないですよ？」

「ああ」

「おほん！」

「!?…」

此方をジツと見つめる人、羨ましそうに見つめる人、ニヤニヤする

神…：羞恥で死ねるぜ！

「ごちそうさんや。こんな甘いもん初めてや」

「いいなあ。私もそんなの言われたみたい」

「……………」

「若いもんはええのお」

「はあ」

暫くはこれをネタにからかわれました

ちゃんちゃん！

複数の女性と買い物に行くのは間違ってる：服屋編

ここはレウスの自室

「僕とデートするって言ったじゃん！」

「レウスは私を鍛えるの」

「レウス。君は僕と一緒に薬買いに行くって言ったよね？」

「ダメ！レウスは私と服を買いに行くの！」

「ダメです！レウスさんは：わ、私と一緒に買い物に行くんです！」

拜啓、読者様：お元気でしようか？私は元気じゃありません

何故なら：ベル、アイズ、フィン、ティオナ、レフィーヤ達から追られているからです

何故レフィーヤはいるんだい？君だったらセリフ的にアイズが関係するよね？なんでアイズのアの字も出ないんだい？

ティオナ、私はいつ貴方と一緒に買い物に行くと聞いたでしょうか？

他はわかる。自分から言ったことだもん

おお、神よ。願わくばこの状況をどうにかしてください

「断る。どうにかして欲しかったらウチをお母さんと呼びい」

「ヘルプ!!お母さん！」

「よっしや任しとき！」

「「「「ジー（無表情＋無言の視線）」」」」

「無理やわ」

神は死んだ！

「おおレウス」

ガレスさん！来た！これでかつる!!

「どうじゃ？この後、一杯酒でm…」

「「「「……………」」」」

ガレスさん！この状況をどうにかしてくれ!!

「…は、また今度でもええの。それじゃあの」

そんなあああ…………ええい！腹をくくれ俺！自分で蒔いた種だ

！2人ほど違うが：まあ、いいか

「じゃあ全員で行くじゃダメか？」

：なに俺鈍感主人公みたいな事言ってるの!? 下手したら修羅場待ってるじゃん!」

「…わかった、今回はそれでいいよ」

「私は鍛えてくれるならいつでもいい」

「まあ、アイズ以外は買い物だから僕もそれでいいよ」

よっしゃ、回避成功!

「それじゃあ行こうぜ?」

そして、まずは服屋に行くことにした、道中ジロジロ見られて、店に入っても見られてる。店の外に人だかりができていたが、俺は知らん……いや、やっぱ気にする。はあはあすんな。涎垂らすな。

「ねえねえ!これなんてどうかな!」

「おい!なんだこの布の薄い服は!」

そうだった、この世界では男女逆転してるから元の世界ではそういう店の女性が着そうな服は男性が着るのか……やだ、痴女ならぬ痴男ね!……あ、それなら強姦とかって強漢になるんじゃないや……言葉って難しいね!

「ねえ、これなんて…どうかな?」

「いいねいいね!最っ高だねえ!!」

「れ、レウス?」

「すまん。変な電波受信してた」

想像したまえ、諸君!前髪を右に寄せてそこを百合の花に似た花のヘアピンをし、服はなんの装飾もないシンプルな白のワンピース、そこに水玉模様のシユシユを腕につけ、靴は水色のスニツポン どうだ諸君、想像できたかい?……え?出来ない?……すまない。

これでも頑張つて教えたんだ、不甲斐なくてすまない

「ジャジャーン！どうかかな？」

「赤いな」

「ぶう、ならこれにしよう」と

カーテンから出てきたティオナはなぜこの世界にあるという
ようなチャイナ服。赤の服で、模様はよくわからないが、おそらくこ
の世界にあるであろう花の形をしていた……いや、もしかしたら俺が
知らない花なだけかもしれない

その後、もう一つ着た服はアマゾネスらしく露出が高い服だった：
え？もうちょい詳しく？…いや、ティオナがいつも着ているのと大差
なかったから別にいいかなって

「…なんで水着？」

「似合ってるからいいんじゃないか？」

「…それならいいけど」

シンプルに水着…夏だからかな？説明？ダンメモの今のイベ
ントのアイズの水着姿です

「僕にこういうのは似合わないと思うんだけど」

「人形みたいで可愛いな」

「……………あ、ありがとう」

あ、やべ…つい本音が

「あの、なんですかこれ？」ピ、ピカ

「何故に着ぐるみ？」

「似合うかなって」

ティオナがレフイーヤに着せたのは某黄色い電気ネズミに似た着
ぐるみ

下手したらこれアウトじゃね？

その後も楽しい着せ替えは続いた

尚、外にいた人たちはレウスが着たタキシード姿に見惚れて意

識が飛んでいたとか
この世界の女性、耐性なさ過ぎじゃない？

ナマモノ「いらっしやいませにや〜」

みんな楽しく服を着て気に入った服を買った後、追いかけてくる女たちから逃げ切ったら大通りに出て小物、果実など色々なものを売っている店を見ながらいい時間になったので飲食店を探しているとある店が目に入った

『アーネンエルベ』

(・ω・)

(。D。)

待て待て待て待て待て!!!なんでこの店がある!?!この店TYPEEM OONの作品の殆どに出てくる店じゃねえか!?!なんで!?!いやガチでなんで!?!

やべえよ!TYPEEM OON関連の店とか嫌な予感しかしない! ……でもなあ…気になる。めっちゃくちゃ気になる。中にどんなのがあるのかとかどうゆう料理を出すのか……よし!

「なああの店はどうか?」

『『アーネンエルベ』?どんな店なんですか?』

「やべえ店」

「え?」

「とにかく退屈はさせない店だって事は言える」

「…そうなんですか、いいですよ行きましょう」

「うん、私達も賛成」

「レウスが一目置く店か……なんだろう。何故か親指が震えてきたよ？」

「……フィンの親指が震えるってやばくね？
マジやばくね？」

「はい、知ってましたよこんちくしょう!!フィンの親指が震えて、TYPEMOONの店って時点でやばいって事は薄々わかってたけど！」

「こいつらが居るとか普通考えるなんて無理だろ!!!?
「いらつしやいませにやー。何名様でしょうか？」

「だって、こいつが出る作品って、月姫とカーニバルファンタズムくらいだもん……え？それだけじゃわからない？」

「……二足歩行で目が赤くて身長が30cmくらいでネコ精霊で目からビームを出すネコってなーんだ？」

「答えは〜」

「あちしはネコアルクにやー。あ、魔物じゃにやいから安心してにゃ。それと、これメニユー表にゃ。それじゃあごゆつくりしたいてくださいにゃ〜」

「()(ゆ、ゆつくりできない!!)()(レ、レウス!あれ何?!」

「確か、精霊の一種で総じてナマモノって呼ばれてる。あ、それとあんま喧嘩売らねえ方がいいぞ?俺でも勝てるかわかんねえしな」

「レウスがそこまで言うほどとはね……って精霊!」

「ま、そこらへんは考えねえようにしようや。今は飯だ飯……お?『店

長オリジナル料理Ver. 5. 2β』：なんかすげえ名前前の料理だな。俺はこれにすつか…お前たちはどれにするんだ？」

「私はこの『○ツキースペシャル』！」

「わ、私は『BOSS料理』です」

「：私は『心が叫びたがるほどの料理』」

「そうだね…僕は『ボルシチ』にしようかな」

「僕はレウスと同じのにしようかな」

変だな…まともな料理名がフィンしか言っていないぞ？他のはやばい。

しかあし!!夢の国のネズミだろうが!ダンボール被るBIGな方の名前が入っていようが!俺は逃げも隠れもしない!どんどこいやあ!!!

「はい、私お手製オリジナル料理にや。感想後で聞かせて欲しいにや」
なんとという事でしよう…先ほどまで楽しく会話していたと言うのに机に置かれた料理?が来た瞬間全員の顔が引き攣るほど空気が変わりました。

そこには皿に乗せられた黄色い肉と、肉に乗せられた虹色のソース?とマグマのようによくぶくと空気が漏れ出てる紅いスープ、別の皿に入っている野菜は触れてみるとグチャと効果音がしそうなほど柔らかく禍々しい色…目がおかしくなければ全ての料理から紫色のオーラのようなやべえものが見える……これを食えと?

「次は○ツキースペシャルにあ〜」

変だなテイオナの前に置かれた料理は見た目はまともなネズミの形をしたパンケーキのようにも見えるが、来た瞬間「ハハッ」って甲高い声がした気がするが…うん気のせいでしょう。

「まだまだにや〜」

レフイーヤの前に来たのは……うん……蛇の丸焼き?…BOSSだからスネークってか?アツハツハ……全国のメタルギアファンに作者が殺されそう。

「ほいほいにあー」

アイズの前に置かれたのはコロツケ?…あ、アイズの目が輝いた

お?アイズが食べた……うん?なんで口抑えたの?…え?口を抑えてないと叫びなくなる?……まあ、あの映画に関係はないのか……コロツケの中身にヒゲのようなものが書かれた卵が見えた気がしたが、俺は何も見っていない。

フィンのはどこからどう見てもボルシチだ

さあ、ベルよ……新たな世界が開くかもしれんが……いざー!南無三!

カランカラーン

「またのお越しをお待ちしていますにやー」

は!?あれ?なんで俺は今店の前にいるんだ?

「…あれ?僕なんで店の前に?」

「だ、大丈夫?君たちアレを口に入れた瞬間無表情で次々と口に入れていくし話しかけても何の反応もしなかったら心配したんだけど…」
……っ!?!…思い出そうとすると口と胃と脳が全力で拒否する。まるでパンドラの箱だと言うように。」

そういえば次はミアハファミリアに行くんだったな……この世界でのミアハ様って普通に男なのだろうか?……会ってみればわかるか

女だったらナーザと百合百合しい展開になりそうで私は大変満足です。